

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07326

研究課題名（和文）津軽方言の談話資料を用いた複数種の対格の使用動機の究明

研究課題名（英文）A study on Differential Object Marking of Tsugaru-Aomori Japanese

研究代表者

大槻 知世 (Otsuki, Tomoyo)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：30805205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主格・対格とも無助詞が無標である津軽方言において、有形対格標識と見られる6つの形式「バ、トバ、ト、ゴト、ゴトバ」が存在することを報告し、使い分けの動機について究明した。当該言語における本来的な対格標識は3つ「バ、ト、ゴト」であると考えられる。有形の標識の選択の要因として、前接名詞句の意味的性質である有生性、特定性と、前接名詞句の焦点化が挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、主格・対格の名詞句は無助詞（格助詞を伴わないこと）が無標（普通）である津軽方言において、実際には複数の有標の形式が用いられていることを、有標の対格形式と考えられるすべての形式とあわせて報告し、諸形式の使用動機を解明した。方言における示差的目的語標示（DOM：Differential Object Marking）の研究は注目を集めつつあり、その中で本研究は初めて津軽方言のDOMを包括的に記述し報告したものである。DOMは通言語的にも興味深いトピックであり、本研究の研究成果は一般言語学にも資することができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to elucidate the difference of the overt clitics that works to mark objects in the Tsugaru-Aomori Japanese. Subjects and objects are typically not marked in this dialect. In other words, zero case marking for subjects and objects is unmarked in the Tsugaru. At the same time, there are also six object-marking clitics: “ba”, “toba”, “to”, “goto”, and “gotoba”. Among these clitics, “ba”, “to”, and “goto” can be thought to be original case markers.

In conclusion, animacy, specificity, and focus of the cliticized nouns determine the usage of the object-marking clitics.

研究分野：言語学

キーワード：青森県津軽方言 対格 示差的目的語標示 DOM

様式C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

青森県西部で話されている津軽方言では、対格(目的語)標示の機能をもつ形式が、無助詞も含めると7つ「φ(無助詞)、ヲ、バ、トバ、ト、ゴト、ゴトバ」確認される。当該方言では、他の東北方言と同様に、主格と対格は無助詞が普通であり、対格名詞の7割強は無助詞で現れる。本研究では、出現頻度は3割に満たないにもかかわらず有形の形式が多数存在する理由を追究するべく、有形諸形式の使い分けの動機の解明を試みた。なお、他の東北方言では、有形の対格形式は、あっても2つほど(「バ」と「ゴト」など)である。

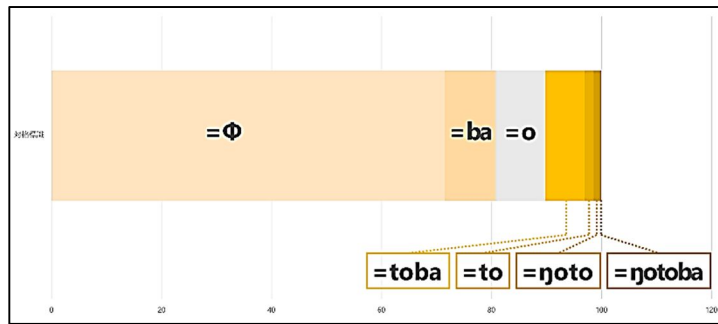


図1 出現頻度3割弱ながら多様な対格標示形式

2. 研究の目的

本研究の目的は、青森県西部で話される津軽方言の多様な対格形式(目的語標示形式)の使用の動機を究明することである。研究代表者は実際の用例に基づいた津軽方言の文法研究を行っており、総合的な記述文法をまとめている。その中で、先行研究では議論されていない津軽方言の7つもの対格を初めてみとめた。7つの対格を持つ方言は他には無い。使用動機の一つには情報構造が考えられる。若年層には継承されていない対格もあり、複数の対格を保有する話者は70歳代以上の高齢層に限られてきている。方言の伝承の点でも複数の対格を追究する点でも、談話資料に基づく調査・研究は急務である。

3. 研究の方法

本研究の研究対象である対格助詞は、話者自身も認識していない場合が多いため、無意識のうちに談話に現れるものを観察する必要がある。そのため、調査には自然談話観察を用いる。自然談話観察で補足しきれない場合は、高年層の話者による昔話の語りの文字起こし(昔話テキスト)を調査する。テキスト化には編集作業が伴うが、本研究には、話者・文字化担当者・編集者の全員が津軽方言話者(大半は高年層)である昔話テキストを使用する。

自然談話観察の実施に際しては、高年層の話者(理想的には7種全ての対格を保有していると思われる生え抜きの80歳代以上の方。現実的には体力的に調査に堪える70歳代以上の方)にご協力をお願いし、自然談話を録音する。

次に、談話の録音を書き起こしたテキストから対格標識を抽出し、前後の環境や、共起する動詞との関係、対格名詞の意味的特徴、文の情報構造など、統語論的、形態論的、意味論的の各側面から分析する。対格標識が出ない場合、当該の対格標識を含む例文を話者に提示し、適格性を尋ねるなどして正確なデータを蓄積する。録音を書き起こす際に生じる疑問は面接調査で話者に尋ねて解消する。

この際にご協力いただく話者には比較的長時間に及ぶ内省と洞察、体力が必要であるため、方言の知識と言語的内省に優れている限り、必ずしも自然談話の話者と同一人物でなくともよい。

こうして得た談話資料に基づいて対格を分析し、使い分けの仕組みを解明し、津軽のDOMを詳述する。

本研究に先行して実施した予備的な調査においては、同一の文脈においてどの対格を用いても良いとする回答も得ており、今や各対格の違いが磨滅していると考えざるを得ない。このため、原初の使い分けの動機を示すと期待される、より古い方言の資料を求めて、既存のテキスト(昔話や、国立国語研究所編『ふるさとことば集成』など)の調査を行う。

4. 研究成果

研究の結果、有形の対格標識のうち方言固有形の「バ、トバ、ト、ゴト、ゴトバ」については、より少ない3つの助詞「バ、ト、ゴト」に還元できる。方言固有の「 ϕ (無助詞)、バ、トバ、ト、ゴト、ゴトバ」の使用動機については、フローチャート化することができた。すなわち、0「対格名詞句の使用」>1「 ϕ でも対格と理解可能か」>2「前接名詞句の意味的性質を標示するか」3a「(前接名詞句が)有生かつ特定であると標示するか」(>3b「(前接名詞句の)焦点化をするか」)>4a「人間名詞であると標示するか」(>4b「(前接名詞句の)焦点化をするか」)という選択肢を措定した。

これにおいて、0-1で満たされれば「 ϕ 」を使用することになり、0-1-2まで行くと「バ」を使用することになる。その他も同様に、0-1-2-3aなら「ゴト」、0-

1-2-3a-3bなら「ゴトバ」、0-1-2-3a-4aは「ト」、0-1-2-3a-4a-4bは「トバ」となる。なお、「ヲ」は標準語的なスタイルが意識される場合に現れやすい。

通言語的に、対格形式が複数存在する場合、前節名詞句の有生性や特定性が効いていることはよくあるが、本研究によって、焦点助詞も対格形式を構成しうることが明らかになった。一般言語学で注目される示差的目的語標示(DOM)に重要な示唆を与える結果となった。

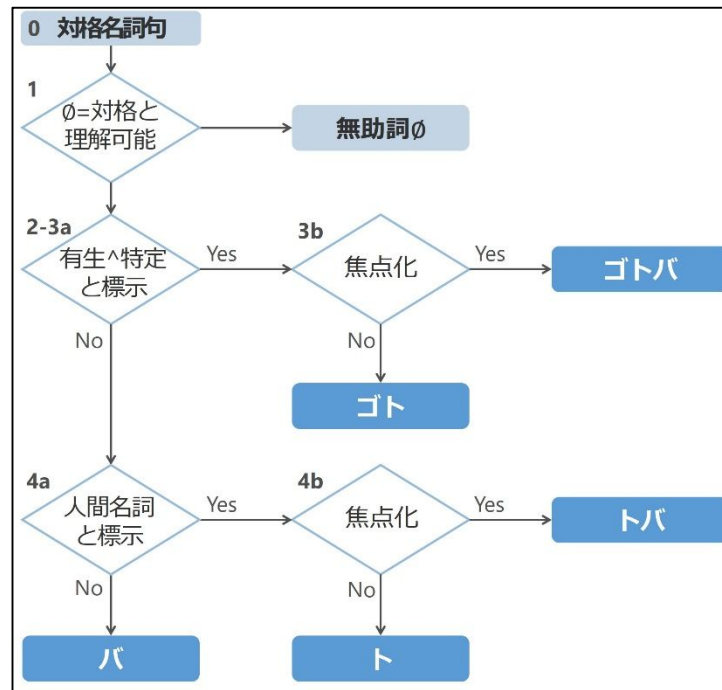


図2 津軽方言の対格標識選択のフローチャート

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大槻知世
2. 発表標題 青森県津軽方言の概説
3. 学会等名 九州大学言語学研究会第103回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大槻知世
2. 発表標題 青森県津軽方言の対格標示
3. 学会等名 九州大学言語学研究会第108回
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考